

社会的望ましき尺度の 下位概念を探る — クラスタ分析による検討から —

河内 和直*

Exploration on Subcategory in Social Desirability Scale — Examination by Cluster Analysis —

Kazunao KAWAUCHI

In this study, we examined subcategories of the social desirability scale through cluster analysis that uses the manifest variable of each item. As a result, three clusters have been confirmed, i.e., desirable attitude to others, desirable moral acts, and desirable control of feelings. This result indicates that it is possible to classify the items of the social desirability scale not only by correlations with potential variables but also by the degree of similarity between manifest variables. We believe that close examination of the characteristics and purpose of the scale will be required in future studies. This will be especially true for validity scales such as the social desirability scale.

Key words: social desirability scale, subcategory, cluster analysis

問 題

社会的望ましき (social desirability: SD) 反応とは、自己記述式的人格検査などにおいて、項目の叙述内容ではなく、その一般的な望ましきの程度に応じて回答を行う反応歪曲の一つであり、測定の妥当性に関わる問題として古くから関心が払われてきた要因である (ex. Edwards, 1953 etc). こうした背景の下、受検者各人における SD 反応の検出を目的に作成されたのが「SD 尺度 (ex. Crowne & Marlowe, 1960 etc)」であるが、その下位概念の同定に関しては、これまでに体系的な検討はなされてこなかった。その理由の一つとして挙げられるのは、北村・鈴木 (1986) の指摘のように、当該尺度が有する内的整合性の不明瞭さであると考えられる。実際、因子分析を用いて下位概念の抽出を行った神村・嶋田 (1994) の結果を確認すると、項目の大半が整合性を低めるものとして除外されており、抽出された因子の信頼性係数も高いとは言えないことが、その

一つの示唆であると言えよう。SD 尺度の内的整合性を巡っては、その一要因に項目の邦訳や叙述内容の文化差に由来する論点を挙げることができるが、他の視点としては適用している統計的方法、すなわち、計量心理モデルに由来する論点も挙げられるのではないだろうか。SD 尺度は「望ましい項目の是認」・「望ましくない項目の否認」をもって SD 反応としている。この仮説に対して、当該行動・思考の同次元性を問題にするのではなく、その項目が内包する行動・思考の一般的価値を直接的に扱うことが本研究の主張である。言い換えれば、SD 尺度の項目を仮定される潜在変量との相関関係で捉えるのではなく、個々の項目が持つ価値値、即ち、顕在変量による類似度で捉えることで、新たな項目観に立った SD 尺度の構成が可能になるのではないかということである。そこで、本研究では、個々の項目が有する観測値を手がかりにクラスタ分析による経験的分類から、SD 尺度の下位概念の探索を行うことを目的としたい。

方 法

調査対象者 大学生および専門学校生 875 名 (男性 339 名, 女性 536 名)。平均年齢 20.27 歳 (*S.D.* = 4.13)。

SD 尺度 河内 (2006) による Crowne & Marlowe (1960) の SD 尺度 (The Marlowe-Crowne Social Desirability Scale: MC-SD) の邦訳版 22 項目を使用した。

手続き 授業時間の一部を使用して集団法で実施した。対象者には、プライバシーへの配慮を説明した後、「提示された行動や考え方の特徴が自身にどのくらいあてはまるかを回答せよ」との教示の下、リッカート式の 7 件法 (7. 非常にあてはまる ~ 1. 全くあてはまらない) で評定を求めた。

また、本研究における分析の視点は、計量心理モデルの差異のみを問題にしているため、対象母集団や調査法などの諸条件は先行研究との整合性を考慮して行った。

結 果

クラスタリングの変数 SD 尺度の下位概念について検討を行うべく、各項目の基本統計量を基礎データに階層的クラスタ分析を行った。基本統計量として採用したデータは、平均値、標準偏差、歪度、尖度の 4 指標であり、各項目における得点分布の代表値、散布度、分布型に関する特徴データを手がかりとした形になっている。なお、本研究におけるクラスタリングは、各統計量が有する意味を分類に活かす意図から、変数の標準化は行っていない。

SD 尺度のクラスタリング いくつかの手法によるクラスタリングを試みた結果、その解釈可能性から、最終的に平方ユークリッド距離・Ward 法による 3 クラスタ解を採用した (Rescaled Distance Cluster Combine = 5)。得られたデンドログラムを Figure 1 に提示する。

* 群馬社会福祉大学 非常勤講師
Gunma University of Social Welfare, Part-Time
Lecturer

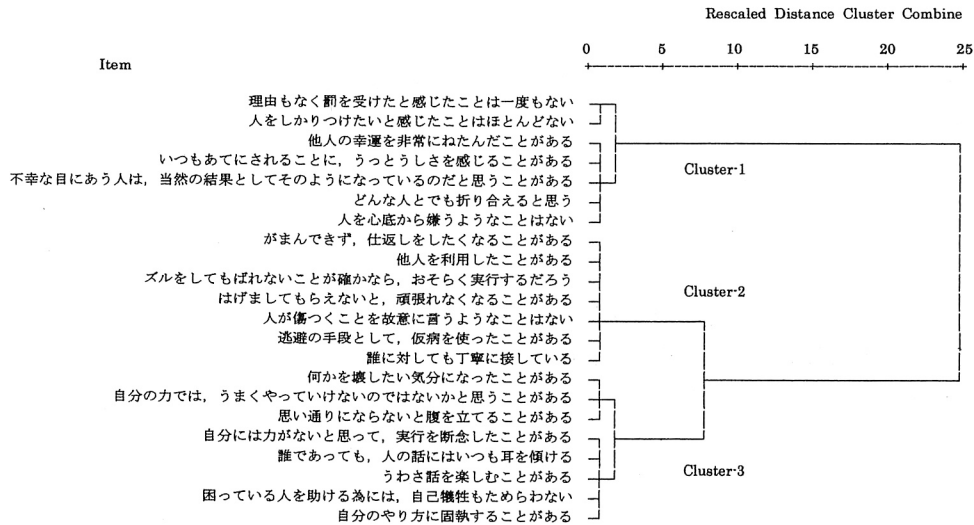


Figure 1 社会的望ましき尺度項目のデンドログラム

第1クラスターは、“理由もなく罰を受けたと感じたことは一度もない”，“人をしかりつけたいと感じたことはほとんどない”，“他人の幸運を非常にねたんだことがある”といった主に他者への態度に関する価値志向を表現するものであるため，「望まれる対人態度」クラスターと解釈した。続いて，第2クラスターは，“がまんできず，仕返しをしたくなることもある”，“他人を利用したことがある”，“ズルをしてもばれないことが確かなら，おそらく実行するだろう”といった主に道徳や規範意識に基づいた行動に関する価値志向を表現するものであるため，「望まれる道徳行動」クラスターと解釈した。最後に，第3クラスターは，“何かを壊したい気分になったことがある”，“自分の力では，うまくやっていけないのではないかと思うことがある”，“思い通りにならないと腹を立てることがある”といった主に衝動や情緒のコントロールに関する価値志向を表現するものであるため，「望まれる感情統制」クラスターと解釈した。比較的，単純化された記述枠が得られた。

考 察

本研究の結果を踏まえると，一言に望ましい行動と言っても，その価値づけには，やはりいくつかの側面が存在するようである。実際，SD尺度は，ビッグファイブ・モデルの調和性，良心性，神経症傾向と一定の関連があることが報告されており（堀尾・高橋，2004；河内，2006），本研究においても，それらとの対応関係を伺えるクラスターが抽出された点はやはり興味深いと言える。これらの知見を鑑みると，SD尺度に内包される行動・思考の価値志向は，他者との調和，良心に基づいた行動，感情のコントロールといった下位概念で分類・解釈することができそうである。

統計パッケージの普及も手伝ってか，尺度，あるいは心

理変数の下位概念の検討には，定石のように因子分析がよく登場する。しかしながら，内的整合性，すなわち項目間の相関関係を高める努力だけでは，かえって重要な心理指標を取りこぼしてしまいかねない。MMPIではないが，外的基準との関連で受検者の特性を識別しようとする視点も必要であろう。少なくともSD尺度は，基準関連的方法による尺度化が望ましい心理尺度の一つであると考えられる。

引用文献

- Crowne, D. P. and Marlowe, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology, *Journal of Consulting Psychology*, 24(4), 349-354.
- Edwards, A. L. (1953). The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed, *Journal of Applied Psychology*, 37(2), 90-93.
- 堀尾志保，高橋 潔 (2004). 作為回答場面での5大因子性格検査に関する反応妥当性尺度の役割，*産業・組織心理学研究*, 17(2), 65-77.
- 神村栄一，嶋田洋徳 (1994). Marlowe-Crowneの社会的望ましきの尺度日本語短縮版の作成の試み，*ストレス科学*, 9, 7-18.
- 河内和直 (2006). 社会的望ましき尺度得点に関する一研究—その人格特性概念としての性質を探る—，*立正大学心理・教育学研究*, 8, 1-10.
- 北村俊則，鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について，*社会精神医学*, 9(2), 173-180.

(受稿：2008.5.6，受理：2009.1.22)